

探訪 北の風景 63

土づくりの歴史を見る 土の館

上富良野町

青木和弘

上富良野町はラベンダー観光と十勝岳登山で知られる町だ。基幹産業は農業で、麦類や豆類、水稲、甜菜（てんさい）、ジャガイモの作付けが多い。北海道内で唯一のホップ産地で、1926年（大正15年）に大日本麦酒（現サッポロビール）の上富良野ホップ園が開設されている。畜産は養豚が盛んでブランド肉「かみふらのポーク」が有名。ラベンダー栽培は1948年（昭和23年）から始まっている。

人口は5345世帯1万664人（5月末現在）で、約3割は自衛隊員とその家族が占める。

歴史は古く、縄文時代から栄え、アイヌ文化の伝承が残る。1858年（安政5年）に松浦武四郎がフウライイ（現上富良野町）を訪れ十勝越えの調査にあたっている。当時の文献に噴煙をあげる十勝岳を眺めた記述があり、深山峠に「顕彰碑」がある。

入植者による本格的な開拓が始まったのは1897年（明治30年）4月以降になる。三重県からの入植者が続々と入り、同年7月に富良野村を創立。同年12月には歌志内―下富良野（現富良野市）間の仮設道路が開通した。2年後の1899年6月に富良野村戸長役場が上富良野に開庁し、11月には建設中の官設鉄道（十勝線（旭川―下富良野）（現JR富良野線）が上富良野まで延び、翌年8月に全線開通している。

1907年（明治40年）に釧路―旭川間が開通して交通の便がよいことから、全国各地から集団開拓団が入植してきた。

現JR根室線の滝川―富良野間が開通するのは、さらに6年後の1913年で、この地域が空知ではなく上川との結びつきが強いのは、こうした歴史があるからだ。

話は変わるが、1926年（大正15年）5月24日の十勝岳大噴火は、高温の岩屑（がんせつ）なだけが残雪を溶かして大規模な泥流が発生し、1



第2展示場「世界のプラウと土の展示室」。世界各地のスキヤプラウ、国内外から採取した土壌標本などを展示。農家経営の特色や土づくりの苦労なども学ぶことができる

44人の死者・行方不明者を出している。当時の様子は三浦綾子の小説「泥流地帯」「続泥流地帯」に詳しく描かれているが、その中に当時の農家の暮らしが記載されている。土砂や樹木で覆われた農地の復興に大変な労力を要したことは想像に難くない。

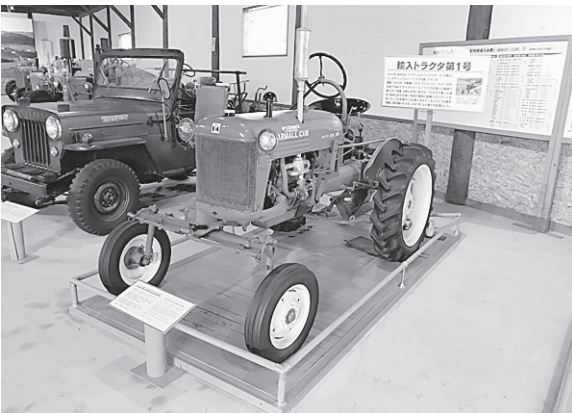
明治以降の北海道開拓には先端農業技術が導入され、土を耕すプラウを馬などに引かせる畜力が広く導入されていった。現在は、トラクタが使われているが、人馬による開拓や土壌改良には想像を超える苦労があった。そんな農業の歴史の一端を学ぶことができる絶好の施設が上富良野町にある。

上富良野は、日本のプラウ製造のトップ企業「スガノ農機」（本社・上富良野町）の誕生の地である。農業関係者にはよく知られた企業で、同社は発祥





土の館は十勝連峰を見渡す丘に建っている。1953年導入のクローラトラクタ45馬力（日本特殊車両製）と、スガノ農機創業者菅野豊治の妻サツの父が植えた入植記念樹の「甚作松」（1994年移植）。左後ろの建物はトラクタ博物館



輸入トラクタ第1号は1951年奈井江町の北修二牧場が導入。ファームルカブトラクタ（9.75馬力、米国製）で、120万円。当時、住宅1軒が60～70万円で建った。ここには総勢93台の世界のクラシックトラクタを常設している

の地に1992年（平成4年）、博物館「土の館」を開設した。創業当時の農機具製作、世界のプラウや土壌の展示などがあり、別棟には国内外のクラシックトラクタを保存したトラクタ博物館もある。農業関係者でなくても見応えがあり、ぜひ見学をお薦めしたい。

土の館は2004年に北海道遺産に選定され、2014年には日本機械学会の日本機械遺産に認定。2017年には国立科学博物館（未来技術遺産）の重要科学技術史資料に2点が登録されている。観光シーズンの7、8月以外は土日祝日が休館になるのでホームページなどで開館日を確認する（土の館・上富良野町西2線北25号 電話0167-4513055）。